

2008年11月10日

大阪府知事
橋下 徹 殿

社団法人 日本建築学会
会長 齋藤 公男

大阪府立総合青少年野外活動センターの保存に関する要望書

拝啓 時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、貴下におかれましては、大阪府の財政の見直しにともない、大阪府立総合青少年野外活動センターの「廃止」を予定である由、拝聴しております。

この建物は、別紙「見解」に記しますとおり、20世紀日本を代表する建築家・坂倉準三（1904 - 1969）の設計事務所、坂倉建築研究所大阪事務所により、1964年から1979年にかけて設計されたものです（開館は1967年）。剣尾山麓の広大な敷地の中に、複数の宿泊施設やキャンプ施設の建物が、分散しながら小さな集落のように配置され、自然との見事な調和を生み出しています。個々の建物は簡素ではありますが、鉄筋コンクリート造、木造、山小屋風、修道院風といった様々なスタイルを持ち、変化に富んだ優れたデザインとなっています。高度成長期の国民のレクリエーションの拡大を背景に造られたもので、時代の特徴をも有した、優れた歴史的建造物だと言えます。

近年では、こうした建築物は、建築資源の有効活用の視点からも、構造体の補強および機能に応じた整備によって長寿命化を図り、新たに活用してゆくことが求められております。

貴下におかれましては、このたびの計画に際し、その価値を十分に認識され、かけがえない文化遺産を後世に継承していただけるよう、深甚なるご配慮をたまわりたく存じます。

なお、本会はこの建築の活用ならびに保存に関して、技術的支援などできます範囲でお手伝いさせていただきたいと考えておりますことを申し添えます。

今後とも、この優れた由緒ある建造物と環境の保全に、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

敬具

2008年11月10日

大阪府立総合青少年野外活動センターに関する見解

社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 初田 亨
近畿支部近代建築部会
主査 橋寺 知子

・建物の概要

大阪府豊能郡能勢町宿野に所在する本建物は、京都府との境界に近い剣尾山麓の森林に囲まれた細長い谷間の、面積にして約180haの敷地に立地している。1964年(昭和39年)12月に第1期の本館建物が竣工し、1979年(昭和54年)10月に第10期の建物が竣工するまで、10年以上に渡って増築がなされて完成したものである。施設の中心となる本館の建物については、鉄骨鉄筋コンクリート造、地上2階建ての建築で、建築面積1,558㎡、延床面積1,662㎡となっている。この建物を中心に、大小合わせて数十の建物や設備が敷地内に建っている。設計は第1期から第10期まで、いずれも坂倉建築研究所大阪事務所によるものであり、施工は松村組、岡組、富士工務店、田淵工務店による。

竣工後、部分的に改修は行われているが、建物の外観や内部空間などのほとんどすべての建物が、ほぼ竣工当時のまま残されている。全体としては大変良好に維持活用されている。

・日本における近代建築の秀作としての評価

当該施設は、複数の宿泊施設やキャンプ施設からなり、200から300m程度の間隔を置いて、小さな建物が群を成しながら分散配置されていることに特徴がある。個々の建物は簡素で無装飾なモダニズムのデザインによるものだが、複雑な地形に合わせて内部空間は程よく変化し、傾斜屋根を載せているなど、豊かなものとなっている。また建物ごとに、鉄筋コンクリート造、木造、山小屋風、修道院風、スパニッシュ様式風など、様々な要素が見られる。こうした手法によって、自然と対話し調和する見事な建築を作り出している。

こうしたデザインのあり方は、設計された時代性をよく反映するものである。1960年代の日本は高度経済成長期に当たるが、公害問題や学生運動が生じるなど、いわゆる近代化が曲がり角に差し掛かる時期でもある。こうした情勢は建築のデザインにも影響を及ぼし、従来のモダニズム建築とは異なる、変化ある豊かな空間を造り出すことが新たな課題となっていた。当該建物は、まさにそうした課題に応えた優れた建物となりえている。

またこの時期、日本では国民のレクリエーションのあり方や健全な青少年育成が新たな社

会的テーマとなっていた。そんな中で、地方自治体による「保健休養」のための施設として設置が進められたのが「野外活動センター」である。当該建物は、「野外活動センター」の原点をなす、画期的な建物であると言える。

こうした建物のあり方が高く評価され、当該建物は1967年の日本建築学会賞を受賞している。日本建築学会賞は、国内の建築に与えられる賞のなかで最も権威ある賞であり、最高の評価を受けたことになる。受賞の際には、「各種施設の配置計画の確かさと自然環境と建物との巧みな結びつきが特色をなし、ここの施設の規模の適切さと相まって建築的に高いレベルのものとすることに成功した」と評されている。

1950年代後半から1960年代に建設された建物は竣工後約50年を迎えるが、近年、文化財として認知される前に解体されるものが少なくない。戦後の復興そして経済成長期の歴史を体現する建築遺産の保護が急がれるものの、同時代に建設された建物は数多く、まだ評価が定まっていないのも事実である。しかし、その中でも日本建築学会賞を受賞した当該建物は、後世に継承するに値する戦後建築の一つと評価できる。

・坂倉建築研究所の作品としての価値

当該建物は、日本近代を代表する建築家坂倉準三によって設立された坂倉建築研究所大阪事務所によって設計されており、そのような観点からも大きな価値を有する。

坂倉準三は1904年生まれ。1927年に東京大学を卒業後、フランスに渡り、1929年にパリ工業大学を卒業する。1931年に近代建築の巨匠ル・コルビュジエの設計事務所に入所し、1936年に帰国。1936年に開催されたパリ万博で、日本館の設計を担当した。1940年に坂倉準三建築研究所を設立し、1948年には同大阪事務所を設立し西澤文隆が所長に就任している。1967年には坂倉建築研究所に改称し、大阪事務所も同大阪事務所と改称した。

坂倉準三の代表作には、神奈川県立近代美術館（1951年）、国際文化会館（1955年）、南海会館（現・高島屋大阪店、1957年）、国立西洋美術館（実施設計、1959年）、羽島市庁舎（1959年）、枚岡市庁舎（現・東大阪市旭町庁舎、1964年）、新宿西口広場（1966年）、神奈川県新庁舎（1966年）、芦屋市民会館・ルナホール（1964・69年）、日本万国博覧会電力館（1969年）などがあり、国や地方を代表する著名な建築物の数々を手がけている。

いずれの作品も、機能主義に基づきながら無装飾の抽象的で美しい形態を用いたモダニズム建築であり、坂倉の師匠であったル・コルビュジエの影響も見られる。シャープさと同時に繊細さを併せ持ち、建築界では高く評価されてきた。生前、坂倉は、当該建物を含めて計3回も日本建築学会賞を受賞している。

こうした坂倉の作品の中であって、当該建物の大阪府総合青少年野外活動センターは、坂倉晩年の作品の一つに位置付けられる。モダニズムの手法による簡素だが着実な建物となっており、また白く塗られた壁、窓の配置、赤青黄の三原色の使用などに、坂倉の師匠であったル・コルビュジエの影響が見られる。しかし一方でこの建物は、自然の中に分散配置され、個々の建物は傾斜屋根を持つなど、従来の坂倉作品にはない特徴をも見出すこ

とができる。晩年の坂倉の一つの変化と新しい作風をも示すものとなっている。

坂倉建築研究所は当該建物を皮切りに、埼玉や長崎、奈良、神戸などで野外活動施設を手がけている。規模の大小はあるものの、当該建物での設計手法が引き継がれ、展開されている。当該建物が、その後の坂倉建築研究所の野外活動施設の原型になったと言える。

また、近代建築の保存に関する国際組織 DOCOMOMO の日本支部によって 2003 年に選定された、優れた日本のモダニズム建築「100 選」の中に、坂倉の作品が 4 点も選ばれるなど、近年、坂倉建築研究所の作品への歴史的文化遺産としての評価が高まっている。こうしたことから、是非とも当該建物の保存活用が望まれる。



(撮影：笠原一人氏)